

2010年度8月度の総括

すべての「進学塾ビッグバン」に集う人々へ

私は極めて寡黙な子供であった。上京の自宅附近は現在よりはなお草深い町外れの感じが強く、水田に入って貝をあさり、小蝦こえびをとる子供たちも多かった。夏になれば昼は樹陰に虫を追い、夜は水辺へ蛸を求めた。だが、私はそうした子供たちとともに遊ぶことをしなかった。子どもたちが蝶の翅をむしり、小蝦の皮をはぐのを、私はむしろ嫌悪すべきものに感じた。それより私はひとり丈高い草の中を歩くのを好んだし、夏の月が信じられぬ大きさに、銀色に、まるく、東山に浮かび出るのを、いつまでも眺めたものだ。私が静かな物のたたくまいを好み、移りゆくものの影をひそかに愛するようになったのは、ひとえに、母の落ち着いた、慈悲に満ちた生活の影響である。私は母のいる場所には、常にやさしい静かな光が落ちているような気がした。多くの弟子や職人たちが忙しく出入りしている仕事であるにもかかわらず、母は絶えず誰かれの区別なく、心細かに注意を払っていた。そして職人の中に顔色がわるい男がいたり、ふさぎこんでいる者がまぎれていたりすると、そっと傍へ呼んで、言葉をかけ、母の力でのぞくことのできる原因があれば、最後まで面倒を見てやるという風であった。母のいる場所には、つねに、こうしたやさしさ、静けさ、聡明さが光のようにさしていた。前に話したかも知れぬが、母について、こんな出来事があったのだ。私が小さかったある日のこと、裏口から顔を真っ蒼にした男が走りこんできたことがある。見ると、男は手に血刀をさげている。ちょうどそこに母が居合わせて、男に、一言、お前は追われているのか、と訊ねた。男は肩で息をつき、無言で首をたてに振った。すると、母は、さ、早く、と言いながら、男をそばの物置の中に隠し、戸を立てて知らぬ顔をしていた。ややあって、数人の役人たちがどやどやと踏みこみ、母にむかって、これこれの風体の男を見なかったかと訊ねた。母は仕事の手を休めると、さあ、そんな人は見かけませんでした、きっと別の家に逃げ込んだのでしょうか、と答えた。役人たちも母の様子から、露ほども疑う気配もなく、隣家のほうへ駆けてゆき、男は無事逃れることができたという。母にしてみれば、その逃亡者の眼がひたすら恐怖と焦燥をうかべているとき、なにも逃亡の理由をきく必要がなかった。母が心を動かされたのは、そうした逃亡者の真剣な、ぎりぎり追いつめられた真実の眼まなざしであった。母は何よりもその眼にうたれたのだ。母が男をかくまってやるには、もうそれだけで十分だったのである。母はただおとなしい静かな女というのではなかった。時には、むしろ男まさりの大胆な、勇敢な行動に出ることもあった。松永弾正の雑兵たちが戦乱にまぎれて、略奪に入りこんできたとき、母が彼らの非を説いて帰らせた逐一は私ども一族の語り種くさであった。この母から私は静けさを愛する気持ちとともに、強いもの、激しいものを愛好する性質をも受けついで。いつであったか、私は母とともに宇治に出かけての帰り、とある沼にさしかかると、突然、数百羽の鶴が夕日に向かって舞いたつのは見たことがある。その夥おびただしい羽音は空を満たし、沼のほとりの葦はいっせいに身をふるわせた。私はそのとき母に手をひかれて歩いていた

のであったが、夕日のなかに淡紅色に羽を染めて、飛びたってゆく鶴の大軍を見ている母の手が、次第に強く私の小さな掌を握りしめてくるのに気がついたのだった。それはおびただしい華麗なものが、あとからあとからと惜し気もなく浪費されるのにも似た恍惚とした瞬間だったが、私はその羽音があたりを満たして飛びすぎるあいだ、母の握りしめた手が細かく震えるのを、何か恐ろしいもののように感じながら、そこにじっと立ちつくしていた。母の手が小さな私の掌を次第に固く握りしめてゆくにつれて、その強い痺れるような痛みを通して、私の身体の中にも、甘やかな快感が流れ込むようで、私はしばらくの間、はたして自分が鶴の羽音に包まれて茫然としていたのか、この母の握りしめる手の痺れに甘美に酔っていたのか、思い返すことができないほどであった。気がついてみると、母も私も放心したように、その沼のほとりに立って、もはや飛び残った数羽の鶴がいるにすぎない空虚な水面をぼんやり眺めていた。日はすでに沈んでいて、空にひろがる美しい夕焼けが、沼の面に赤々と映り、細かく生えた葦の葉群れの根がたにも、その赤い反映は冷たい色となってしのびこんでいた。私はそのときのことを思い返すたびに、自分が母からじかに、激しく、ひたすらに燃える心情の火を受けとったのは、あの瞬間だったと思えてならなかった。とまれ、こうした私の性情は、刀剣の冷やかな静謐さの中に沈んでゆくのを、いっそう好ませたような気がする。そこには、清澄な激しさがあった。取り乱すことのない狂乱があった。私はその後しばしば夕空にむかって鶴の群れが舞いたつのを夢にみた。そして彼らの飛びさったあと、東の空に大きな銀色の満月がのぼり、それが静かに沼に影をうつすのを見たのである。そんな夢のなかでは、つねに身をそらすようにして、若い女が沼の傍らに立っていたが、それが母であるかどうかはわからなかった。ただその若い女に私は深い懐かしさを感じていたのは事実だったように思う。

(辻邦生「嵯峨野明月記 第一部」)

辻邦生(1925-1999)は本籍が山梨県八代郡(現笛吹市)で代々医家。旧制松本高校を卒業した後、東京大学文学部仏文科へ。渡辺一夫に師事。父はジャーナリストで薩摩琵琶の伴奏家。母は鹿児島県の医家出身。1957年からのパリ留学後、1963年「廻廊にて」にて近代文学賞。他に「安土往還記」「天草の雅歌」「背教者ユリアヌス」などの作品があります。本編を収録した辻邦生全集3の同作品の帯には、「愛の永生、芸術の滅びと永遠を、雄渾な歴史のうねりの中に描く」とあります。

本編は私の知る限り「母」を描いた最も秀逸なエクリチュールのひとつです。

8月15日は日本では盆があり、死者の御霊が帰ってくる日とされています。おりしも先の大東亜戦争の終戦記念日とも重なり、まともでない日本人や日本の繁栄を喜ばない外国人からは「敗戦記念日」などと呼ばれ、それを唯々諾々と受け入れて、奇妙なことに「二度と過ちを繰り返しません反省の日」とするアホで優しい日本人の存在も確認できる日でもあります。今年の日韓併合100年にあたるとかで、これに先立ち、仙石由人官房長官が起草し、菅直人首相が読み上げる「談話」なるものが発表されました。案の定、韓国から

は嘲笑され、中国や北朝鮮からは「俺たちにも謝罪と賠償をしろ」と恫喝され、そして日本の国民、とりわけ若者には、今後も続く金銭的「負債」を残存させたまま、さらなる心理的「血債」を上積みさせる結果となりました。そして 8 月末における日本の政局はこの頭も心も卑しい仙石や菅らと、これまた外国人参政権を強引に推し進め「媚中媚韓」をもっとあからさまに行うに決まっている金権政治家小沢一郎とが民主党代表をかけて争うこの上なく醜い図式に染め上げられています。

盆に帰ってきた死者たちも心おきなくあの世へと戻ることもできないでいるのではないかと思います。

8 月 1 日。私は家族のうち、妻と中学三年になる 3 男を連れ立って今年 3 回目となる靖国神社参拝を行いました。今回は昇殿はしませんでした。この国の幾久しい繁栄と、ビッグバン生の医学徒としての将来の栄光を英霊に祈ってまいりました。10 年ほど前、アフリカランバレネにあるシュバイツァー博士の墓に参拝した折にも、「ビッグバン生の医学徒としての栄光ある未来」を祈り、そばにいたシュバイツァー精神を受け継ぐ白人の医師に「何を祈ったのか」と聞かれ、正直に答えたところ失笑を買ったのを思い出しました。

靖国神社境内にある遊就館の中には英霊たちの写真と、わかる限りの経歴が掲載されていますが、その中に、栗栖良（くりす りょう）という「碧い眼の英霊」があるのを見つけました。父が駐米大使、母がアメリカ人という、今で言うハーフの男子でした。「米軍機を撃墜したのち自らも負傷し、帰還後その負傷がもとで死す。靖国神社に合祀。」とだけ簡単に記してありました。彼は死ぬ時「お母さん」と叫んだのでしょうか。お母さんはアメリカ人として、その胸中はいかばかりだったのでしょうか。

辻邦生は次のように「母」を描きます。

「母の手が小さな私の掌を次第に固く握りしめてゆくにつれて、その強い痺れるような痛みを通して、私の身体のなかにも、甘やかな快感が流れ込むようで、私はしばらくの間、はたして自分が鶴の羽音に包まれて茫然としていたのか、この母の握りしめる手の痺れに甘美に酔っていたのか、思い返すことができないほどであった。気がついてみると、母も私も放心したように、その沼のほとりに立って、もはや飛び残った数羽の鶴がいるにすぎない空虚な水面をぼんやり眺めていた。」

そして「私」は次のような「取り乱すことのない狂乱」へと自らを律していきます。

「日はすでに沈んでいて、空にひろがる美しい夕焼けが、沼の面に赤々と映り、細かく生えた葦の葉群れの根がたにも、その赤い反映は冷たい色となってしのびこんでいた。私はそのときのことを思い返すたびに、自分が母からじかに、激しく、ひたすらに燃える心情の火を受けとったのは、あの瞬間だったと思えてならなかった。とまれ、こうした私の性情は、刀剣の冷やかな静謐さの中に沈んでゆくのを、いっそう好ませたような気がする。そこには、清澄な激しさがあつた。取り乱すことのない狂乱があつた。」

辻邦生の描写は、碧い眼の戦士 栗栖良が最期に見た風景を描いているようにも見えます。彼を日本男児として日本国のために戦地に赴かせた栗栖良の母は、おそらく鶴の飛びたつ夕景の中に戦闘機に乗ったわが子を見、そして彼を含めた輝かしい若き戦士たちの残骸の上に、この国の繁栄がもたらされたことを確認したことでしょう。

8月6日は米軍機によって広島に原爆が投下された日です。投下を命じたのはアメリカ大統領：フランクリン＝ルーズベルト。広島市民 35 万人中 14 万人の命を一瞬にして奪ったこの虐殺者を弾劾するでもない祈念式典が今年も開かれました。ヒロシマに招かれた一人に、わが小論文科講師：矢原先生がいます。先生は、言うまでもなく9・11テロ以降世界 100 人の芸術家に選ばれたうちのひとりであり、コンセプチュアルアート界ではわが国随一のアーティストなので、当然のごとく招待されたわけです。ヒロシマから帰るや否や、先生の授業はすこぶるテンションの高いものになりました。

その話を聞いたわがビッグバン生は大いに感銘を受けて、この国の行く末を担う若き医学徒たちの志が確かなものであることをも確認できました。

8月15日は敗戦記念日では断じてありません。戦略の失敗はあったにせよ、私たち日本人は、一度も敗北したことがないのであります。そして今後もこの日本は勝ち続けなくてはなりません。君たちも、病んでいる暇などありません。うだるような暑さもすべて自己のエネルギーに変えて、医学徒の道を進まなくてはなりません。

8月15日は、ビッグバン生にとっては模擬試験の日でもありました。自己採点の結果しかありませんが、おおむね昨年よりいい調子です。ここで課される問題は、センター型問題で、英語は私大医学部より長文のボリュームが大きく、数学などはひねりが少なく基礎的な問題が多い、などの特徴がありますが、これも一つの「型」であってすべてではありません。すなわちこうした問題が得意な人と、不得意な人がいて、不得意な人も別のバージョンは得意であることもあり、あくまでこの「型」が苦手というにすぎません。それを踏まえ、受験校、志望校を絞り込んで行きますから、この試験一つで「伸びた」とか、「伸びてない」ということはできません。はっきり言えば、ビッグバン生は、個人差はあれ、誰も「伸びています」。

同じことが8月27日のクラス分けテストにも言えます。とにかくビッグバン定期試験は、試験慣れすることと、次の対策に資することが目的であって、決して「判定」結果を求めるものではないということをもう一度肝に銘じておいてください。

8月22日は恒例の「大学フェア」が開催されました。前もっていくつかの質問を用意してそれに大学側から答えていただく他に、とっておきの質問ととっておきの答えをいくつかいただきました。それはここで言うわけにはいきません。ホームページでこの「代表総括」は一般公開されますから。あくまで、当日参加したしないにかかわらず、わがビッグ

バン生だけにまとめてこっそりとお知らせします。

大阪医科大学の入試担当者から大変いい言葉をいただきました。

「大阪医科大に合格してくる子は、受験年後半は、一日予備校での授業時間を含めて15,6時間は勉強する、と言いますよ。それぐらいは当たり前ですし、それに辛いとかしんどいという子は大学に入ってもついて行けません。」

ビッグバンの一日強制学習時間（強制自習時間含む）はたったの640分です。これでも大手予備校の2倍の勉強量ですが、まだ、この前後に5,6時間は上積みさせなくてはならない勘定です。

9月には早々に第2回記述模試があります。26日には大阪医科大学キャンパスにて「数学ゼミ」があります。今年は進学塾ビッグバンが例によって「数学」を、駿台と河合が別々の日に、それぞれ「理科」をやることになっています。大阪医科大学にとって、医系予備校とはまさしく、駿台、河合、そしてビッグバンがその3大予備校と言えるようです（笑）。むしろ駿台などは新参者で、ビッグバンの後塵を拝する存在です。実際駿台や河合の医系クラスの医学部合格率はかなり低いです。もっとも彼らにとって、私大医学部の合格率などはどうでもよく、国公立医学部トータルで 名合格だけが狙いなのですが。

もう一度言います。病んでいる暇などありません。今から70年ほど前、君たちより若くして散華した先達のおかげで今のわれわれの繁栄があることをもう一度確認してください。そして、日本が強く豊かに続いていくためにも、君たちの力が必要であることを心に銘じてください。いいですか。一日15,6時間、勉強に勉強を重ねてその栄冠を勝ち取ってください。

平成22年8月末日

進学塾ビッグバン 代表 松原好之（文責）